

## マタイによる福音書6章「御国への投資」

### 1A 霊的な奉仕 1-18

1B 善行 1-4

2B 天の父への祈り 5-15

1C 人に見せるための祈り 5-6

2C 繰り返すだけの祈り 7-15

3B 断食 16-18

### 2A 世における財産 19-34

1B 宝の蓄え 19-24

2B 思い煩い 25-34

1C 食べ物や着る物 25-30

2C 神の国と神の義 31-34

## 本文

マタイによる福音書 6 章を開いてください。私たちは前回、5 章からパリサイ人と律法学者の義にまさる義について見て行きました。それは、自分自身が行なって得ることのできるような義ではなく、もっぱら神からの義、神の義を追い求めなければいけないこと。そして、心の内側を変えていただけならば何もすることができないこと、つまり御霊の新生によって、聖霊の力によって初めて行うことができることを学びました。今回は、キリストの弟子として生きる時に、大きな二つの要素をイエス様が教えておられます。一つは、「霊的な奉仕」あるいは「神への献身」です。ユダヤ人たちが神に奉仕する時に行っていたこと、施し、祈り、そして断食があります。キリスト者もこれらをするように勧められています。そして、「世にある財産に対する態度」です。キリスト者は財産を持たず、世捨て人のようになるようには教えられていません。世にあって生きるように教えられていますが、そこにある富に対してどのような態度を取るべきなのか？を見て行きます。

そして、6 章に貫かれているのは「報い」です。報い、すなわち何かを行なうことによる対価です。天の御国において報いがあるかどうか？ということでもあります。私たちはとかく、「報いのために物事を行なってはいけない」と言います。いいえ、人間というものは、神によって報いを受けるように造られています。その一人一人が行なったことに対して、神は報いを与えられます。その、神の与える報いではなく、人からの報い、物による報い、あるいは神ご自身であっても、自分が神によく見られようと努力することも含め、異なるところに報いを求めるので、報いを求めることがおかしくなります。しかし、自分が行なっていることの報いという、神から与えられている自然の期待や希望を、どこに求めて行くのかを私たちはこの章でじっくりと学ぶことができます。

## 1A 霊的な奉仕 1-18

### 1B 善行 1-4

1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けられません。

ここの「善行」という言葉は、直訳は「自分の義」です。ですから、イエス様は義の行いについての話を5章から続けています。ユダヤ人にとって、また神の御言葉において、義というのは抽象的なものではなく、何か不平等や不公正があるならば、それを正す具体的な行いとして現れます。悪者がいれば、神は罰せられます。そして貧しい者がいれば、持っている者は分け与えます。そこでここでは、義の行いが施しをすることとして現れています。律法には、貧しい者への施しを主は強調されていますが、ユダヤ教ではこれを熱心に行います。

けれども、パリサイ人は外の行いに注意はしていたものの、内側の姿勢については律することはなかったことを私たちは5章で学びました。そこで出て来る動機というのが、「人に見せる」ということなのです。今、話しましたように人は必ず、自分のしていることに対する報いを求めています。そこで外に見える行いをする時、簡単に言うと「人の目を気にする」ということです。人の目には良く見えるようにすることが、自分のしていることの評価になっていくということ。これは、日本の文化では美德とさえされていますね、この頃は忖度なんていう言葉もしばしば使われます。

しかし、イエス様はそのことに対して「気をつけなさい」と言われます。何が問題になるのか？「そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けられません」です。イエス様は一貫して、「天におられる父との関わり、交わり」を私たちに求めておられます。イエス様が天の父の元に行かれてから、御霊を私たちに下さったことによって、私たち自身も神を「お父様」とか「お父さん」と呼ぶことができるようになりました。天の父に、「お前は、よくやったね」と言われるようにしなさいということ、イエス様は言われています。人によく見られるように善行を行なうことによって、自分の魂は天の父との交わりから外れて、枯渇してしまいます。主が豊かに報いてくださると言う喜びを、削いでしまいます。自分の心が、からからになることでしょう。だから、気を付けなければいけないのです。

2 ですから、施しをするとき、偽善者たちが人にほめてもらおうと会堂や通りでするように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。

イエス様は、「偽善者」という言葉を何度も、福音書の中で使っていかれます。これの元々の意味は、演技における演者です。つまり、本当の自分ではなく、人に見せるための演技、仮面を持っているというのがここでの意味です。人には霊的に見せながら実際は違う時、偽善と言います。そ

して彼らが、会堂や通りでラッパを吹いているとイエス様は言うておられますが、これは文字通りではなく、当時の献金箱が角笛の形をしていたそうです。そこに献金することが、人々にはラッパで吹いているように、誰の目にも明らかになることを指しています。そうして、人からのほめ言葉を聞いたとします。そうすると、「彼らはすでに自分の報いを受けているのです。」というのです。つまり、「ああ、あなたの施しはすばらしいですね。」と言われて、それで報いは終わってしまうということです！ああ、なんという虚しい報いでしょうか、自分のエゴはその瞬間満たしますが、瞬間に過ぎ去り、心は再び渇きます。

私たちが同じ働きをしても、報いが異なることをパウロが、コリント第一 3 章でこう語っています。「12 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、13 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。14 だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。」イエス様が戻って来られる時に、私たちの働きの真価が火によって試されますが、その材質の違いは、天におられる父との交わりの中で行われたのかどうか、神を愛し、この方に仕えるという動機だったのかどうかで量られる、ということです。

3 あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。4 あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

人前でラッパを吹きながら捧げ物をするのも誇張ですが、ここの「右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい」ということも、もちろん誇張です。しかし、それぐらい人目に付かぬところで善行をしなさいということです。そして目的は、隠しているということではありません。あくまでも目的は、「隠れたところで見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」ということです。自分の捧げ物が、人に対するものではなく、純粋に父なる神に対するものであるようにしなさい、人の目という要素が邪魔になるのであれば、隠れたところで行いなさいということです。なぜなら、他の箇所ではイエス様は、自分たちの行いを人に見せなさいと命じているところもあるからです。「5:16 あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。」人々の前で見せるのですが、それが、天の父を私たちの行いを見てその人たちがあがめるようになるためだ、ということです。はたして、これは神をあがめるようになっていることになっているかどうか、そうしたことを推し量りながら人々の前での善行は、神に喜ばれます。

## 2B 天の父への祈り 5-15

### 1C 人に見せるための祈り 5-6

5 また、祈るとき偽善者たちのようであってははいけません。彼らは人々に見えるように、会堂や大

通りの角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。6 あなたが祈るときは、家の奥の自分の部屋に入りなさい。そして戸を閉めて、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたところで見られるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

善行だけでなく、祈りもユダヤ人たちは熱心に行なっていました。一日に二度、ユダヤ教徒はシェマーを唱えます。申命記 6 章にある、「主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」を唱えます。朝に、また夜に唱えました。それから、シェモネ・エスレという祈りもありました。18 を意味する言葉ですが、実際には一つ加えられて 19 の祈りです。これを一日に三度、午前 9 時と、正午と、午後 3 時に唱えます。ペテロやヨハネも、午後 3 時の祈りのために宮に上って行ったと書いてあります。しかし、その神に対する祈りですら、人々に見えるために行なってしまっていました。

そこでイエス様は、隠れた所での祈りを勧めます。家の奥の誰も見ていないところで、その部屋で祈ったら、その祈りに対して父なる神が報いてくださいます。このようにして、父なる神との親密な交わりを持つことができます。もちろん、これは再び公に、人に見える形での祈りを否定するものではありません。そうではなく、人に見せるためのものなのか、父なる神に語りかけているものなのか、はっきりと分かるリトマス紙だということです。もし、私たちの祈りが人前ではよく祈れて、独りで祈る時は乏しくなってしまうのであれば、それは自分の心を調べるべきでしょう。主との親密な交わりが希薄になっている証拠です。

### 2C 繰り返すだけの祈り 7-15

以上が、ユダヤ人たちの祈りをイエス様は語られましたが、実は異邦人たちも祈ります。まことの神に対してではなく、神々と呼ばれるものに対して祈りますが、彼らの祈りのようであってならないとイエス様は言われます。

7 また、祈るとき、異邦人のように、同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことば数が多いことで聞かれると思っているのです。

異邦人の祈りの特徴は、「同じことばをただ繰り返す」ことです。エリヤと対決したバアルの預言者を思い出してください。朝から真昼まで、バアルの名を読んでいとあります。祭壇の回りで躍り回って、それから剣や槍で、血を流すまで自分たちの身を傷つけたとあります。キリスト教会の中でも、何度も何度も、同じ言葉を繰り返す祈りを聞いたことがあります。そこにある動機は、「ことば数が多いことで聞かれると思っている」ということです。ユダヤ人たちは、人に印象付ける祈りを捧げていましたが、異邦人たちは、神々に印象付ける祈りを捧げているということです。ここで、何の過ちがあるのでしょうか？

8 ですから、彼らと同じようにしてはいけません。あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。

そうです、人格の触れ合いがないということです。天におられる父なのです、私たちの祈りの相手は。であるならば、印象付けるために努力するのは、全く意味のないことです。また、自分の必要を、相手が何も分かっていないかのように訴えるも間違っています。ここで大事なのは、「あなたがたに必要なものを知っておられるのです」ということです。ここが大きな違いです、必要なものをすでに父は知っておられるのです。だから、必要を知らせるというようなことは必要ないのです。ではなぜ祈るのか？ということでもあります。それが、イエス様が弟子たちに、こう祈りなさいと言われた「主の祈り」であります。

9 ですから、あなたがたはこう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名が聖なるものとされますように。10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように。11 私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください。12 私たちの負い目をお赦してください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します。13 私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください。』

午前礼拝で学びましたので、詳しいことはそちらを聞いてください。ここでは、祈りの目的は、「父なる神との交わり、関係」であることが良く分かるでしょう。この方の名があがめられるようにという願い、そしてこの方の支配、御国が来ますようにという願い。そしてこの方の意志、みこころが地でも行われますようにという願いです。その上で、神の御心がこの地で行われることを願いながら、自分の日用の糧が与えられるように祈りし、また神の赦しが与えられたのだから他の人々を赦す生活の中で神の赦しが体験できるように、それから悪魔からの誘惑がこの世にはあります、そこから救い出されるように祈るのです。

14 もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。15 しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しになりません。

イエス様は、最後から二つ目の、自分に負い目のある人々を赦すことについて取り上げて、ここで強調されています。イエス様の言葉は、しばしば誤解されます。あたかも、自分の行いによる罪の赦し、また救いを教えているように見えるからです。ここで、同じように罪の赦しを教えているイエス様の言葉を紹介しますと、ルカ 7 章 36 節から始まる、シモンの家に来た不道德な女の話です。彼女が涙を流しながら、イエス様の御足に香油をかけ、またその涙で足を濡らしはじめ、髪の毛でふき取りました。この行為についてイエス様は言われました。「この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。(47 節)」ここは、彼女が多くを愛したら、その愛の行為によって、多くの罪を赦しているということではないことが明らかです。なぜなら、パリサイ派シモンのように、赦されることの少ない者だから、愛

することも少ないと言い換えているからです。不道德の女が、これだけ多く愛しているのは、多くの罪を赦されているからに他ない、ということでもあります。

ですから、ここマタイの本文においては、天の父があなたがたを赦しているということは、あなたがたが人の過ちを赦しているかどうかで認めることができるということです。赦しているという行いの中に、神の赦しの真実が自分にも働いているということです。そして、もし赦さないのであれば、神の赦しも体験することができません、分かりません。神は、寛容な方です。多くの罪を赦す方です。けれども、その人が神のところに行き、神の赦しの中に入らなければ、それを享受することができません。自分自身が、人の犯した罪に対してそれをいつまでも恨みに思っているならば、ついに自分自身の罪に対する神からの赦しの確信も揺らいでいきます。

### 3B 断食 16-18

16 あなたがたが断食をするときには、偽善者たちのように暗い顔をしてはいけません。彼らは断食をしていることが人に見えるように、顔をやつれさせるのです。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。17 断食するときは頭に油を塗り、顔を洗いなさい。18 それは、断食していることが、人にではなく、隠れたところにおられるあなたの父に見えるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見られるあなたの父が報いてくださいます。

善行、祈り、そして次の霊的奉仕は、「断食」であります。福音書に、断食の教えがありますし、使徒の働きにも、断食を行なっている人々が出てきます。けれども、手紙の中で断食をしなさいという命令は出てきません。ですから、断食は自主的に行なうにはとても有益ですが、教会の全ての人々が必ず行わなければいけないものではない、祈りや献金のような命令とは少し違います。けれども、断食は神に喜ばれる献身の表れです。パリサイ人は、週に二回、断食を行なったそうです。食べ物だけでなく、水も断ち、それ以外に、髪の毛や肌に油を塗ることも絶っていました。それで、ここでイエス様が言われているように、暗い顔を試みたり、顔をやつれさせて見せていたりしました。そして、油を塗るのを絶つのではなく、むしろ油を塗り、顔を洗います。そして、施しや祈りの時と同じように、隠れたところを見られる父が、このことを喜んでくださり、報いてくださるのです。

要は、自分は人に認めてもらいたいのか、神に認めてもらいたいのかということでしょう。キリスト教会の中に、律法主義的な動きや人間中心の動きが出て来る時は、必ず、「人に取り入れてもらいたい」という欲が背後にあります。ガラテヤの教会にあった問題について、パウロは、「今、私は人々に取り入ろうとしているのでしょうか。神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、人々を喜ばせようと努めているのでしょうか。もし今なお人々を喜ばせようとしているのなら、私はキリストのしもべではありません。(1:10)」神に取り入る、神を喜ばせること、神に言われたことを行い、人ではなく、神に仕える。このような神との関係、天の父との成熟した関係の中で、神に捧げる生

活を送ることができます。

## **2A 世における財産 19-34**

次です、世においてキリスト者はどう生きるべきなのか？その富や財産との付き合いはどうするのか？そして、御国においてどのように報いを受けることができるのか？を見て行きたいです。

### **1B 宝の蓄え 19-24**

19 自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。20 自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。

福音書の中には、パリサイ人で金銭を好む者たちが出てきます(ルカ 16:14)。それは、ユダヤ教の中で、物質的な豊かさが神の祝福を受けていることの証拠となることも教えられていたのです。貧しい人々に施すことの教えもありながら、物質的に豊かになることにも神はその背後におられることを教えていました。それでパリサイ派は、熱心に富を追い求めたとのこと。そして彼らは、財産を盗人から守るために、いろいろなテクニックを持っていました。一つは、両替人に投資をします。そして神殿に預けるのだそうです。なぜなら、盗人でも、いくらなんでも神殿のものを掠めとることには躊躇があったからです。さらに、地下に埋めたり、洞窟に隠したりしたそうです。これらのが、イエス様がここで語られていることです。地下に埋めたら、虫や錆で傷物になります。そしていつなん時、盗人が来るか知れやしません。

そして、「自分のために、天に宝を蓄えなさい。」という新たな投資法を教えます。ここは、最も安全で、盗まれることのない保障されているところです。キリスト者の間には、お金についてのことであれば、それ自体が悪いもの、汚れたものと受け取る傾向があります。元証券会社に勤めていた牧師さんが、こんな質問を受けたそうです。「投資をすることは、罪を犯すことなのでしょうか？」開いた口が塞がらなかったそうです。お金を運用すること、保険をかけることなど、地上にある宝に接し、それを使い、運用することについて、何らやましいことはありません。むしろ、イエス様がここで言われているのは、それを何の目的のために蓄えているのか？ということであり、「天」、そう神の住まわれるところ、王座のあるところ、その天の御国のために宝を蓄えなさいということです。

不正の管理人の喩えが、天に宝を蓄えることについて最も分かり易い話でしょう。ある管理人の不正が発覚して、主人に解雇されることになります。けれども、彼は首になった後の働き口のことを考えていました。それで、こんなことを考えたのです。債務書を持っている者たちを呼んで、その証文の金額を下げたのです。油百バテと書いてあったら、五十と書いたり。こうして、解雇されるのですが、なんと主人は彼が抜け目ないのでかえって、ほめたとあります。どうしてか？彼が今、自分に与えられている立場を使って、将来のために役立てたからです。自分の持っている富を使っ

て、将来、来るべき御国のために投資するという考えです。

私たちにとって、天のために富を蓄えるということはどういうことでしょうか？具体的には、筆頭に挙げられるものは福音宣教でしょう。世界への福音宣教、そしてそれぞれの国、地域での教会の建て上げでしょう。私たちが、主の御国の拡がりの最前線にいるのだということを決して忘れないでください！生活でいろんなことが起こるかもしれませんが、けれども、それはご自身が聖霊に満たされて、イエス様の証しを立てている、一つの戦いの場にいるからに他なりません。ここの教会の一部として生活し、礼拝を楽しみ、そして共に交わり、祈り、伝道をしていくこと、このことに投資すること自体、天のために富を蓄えています。また、世界宣教のために宣教師を支えることも投資でしょう。あるいは、キリスト者による貧しい人々への働きかけに貢献することも、天のために富を蓄えています。

21 あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです。22 からだの明かりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明るくなりますが、23 目が悪ければ全身が暗くなります。ですから、もしあなたのうちにある光が闇なら、その闇はどれほどでしょうか。

「あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もある」・・・これは、はっきりと分かる量りです。たとえば、自分が主のために生きているとしても、自分が多くのもを持っていて、それが主のためではなく、自分のために使っているということであれば、その人の心がどこにあるのかは自ずと明らかだということです。しばしば、クリスチャンはイエス様の言葉を歪曲して、「心が大事だから、行いは関係ない」と言います。いいえ、はっきりと自分がしていること、自分の持っているものがどこにあるのか、自分の使っている時間はどこにあるのか、そういったものに、自分の心が見えています。

そして、「からだの明かりは目」というのは、目にある光が、体に入って来るという考えをユダヤ人は持っていました。自分がいつも、何を見ているのか？それによって、自分の生活全般が決まってくるのだよということです。私たちは何を見ているのでしょうか、何に目を留めているのでしょうか？そして、イエス様は話しを少しだけ変えています。目ではなく、自分のうちに光があるのかどうか？と問いて、それが闇であれば、全く何も見えないではないか？ということです。つまり、イエス様を主として心に受け入れていないのであれば、自分の人生の舵というのは全く操縦することはできず、闇から闇、つまづくしかないということです。

24 だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることとなります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。

ここのイエス様の言葉も大事です。同じように富を持ち、富を運用するのですが、何をもって自分のために蓄え、何をもって天に蓄えているのか？これはすべて優先順位です。どちらが主人にな

っているのかどうか？ということです。神と富、一方を否定するのではありません。神を信じたら、富を否定することではなく、富を使い、ためていったら神を否定することでもありません。そうではなく、神を主人として、その下に富を置くかどうか？ということです。

富には力があります。ここの「富」の言葉はマモンです。マモンというのは、富を神格化して、一つの神となっていました。富には力が伴います。富には自信が伴います。ですから、富を持てばそれだけ高ぶりもましてくる危険があります。そこではっきりと、「わたしは主に仕える」と明確に、神を主人としている者だからこそ、富を運用し、管理することができるということです。世界には、いや日本にも数多く、高所得のキリスト者がいます。しかし、例えばある大企業の社長は、所得の九割を教会や宣教団体、援助団体に献金しているという人もいます。ですから、神を主人とし、富に仕えることを拒むという優先順位が死活的です。さもなければ、富に限らず、どんな良き物も偶像になります。自分がしなければいけないこと、したいこと、それ自体は何ら悪いものではないのに、神を差し置いて大事にしていけば、自分はその良いものであったものに仕えて行くことになります。それが偶像になるのです。

これが、イエス様が言われている「一方を憎んで他方を愛する」ということです。憎むというのは、いわゆる感情における憎悪ではありません。どんなに大事なものであっても、やはりイエスを第一とすると決断する時に、他方を憎むという表現を使います。ここで自分の意志をあやふやにすると、必ずそうした他のものに流されていき、他のものの奴隷となっていきます。

## 2B 思い煩い 25-34

これを聞いていた弟子たちは、もしかしたら、そうした富に仕えるというようなこととは無縁のところにいるかもしれません。けれども、その財産の大きさに関わらず私たちは、生活のごく基本的なことには必ず経済や家計が伴っていることに気づくはずで、その部分において、私たちがとてもシンプルな、神の真理を知って行かないといけないということです。つまり、天の父は、先ほどの祈りにあったように、私たちを日々、養ってくださるということです。

## 1C 食べ物や着る物 25-30

25 ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものではありませんか。

食べること、着ること、私たちの安心の保障となる要になっているものです。当時の庶民の生活について考えますと、基本的に農耕社会でした。しかも、イスラエルの辺りは地中海性気候で、4月から10月まで、ほとんど雨の降らないところにいました。日本でも農業を営む方は、自分たちにはどうしようもない不可抗力があつて、自分の思い通りにいかない苦しさがあります。どんなに手

塩にかけて育てても、ある時の突然の台風で、これまでのものがおじゃんになることもあります。予期もせず害虫が発生するとか。ましてや乾季が非常に長いイスラエルでは、瞬く間に緑が荒野になることもあります。それで、根本的に不安を抱えていました。しかし、日本も同じでしょう、興味深いことに、イスラエルに住むアラブ人の人が作ったビデオの中に日本が出てきました。彼は子供のころから、日本はすばらしい国だと聞いていたそうです。あなたも日本人のようになりなさいとまで言われていたそうです。何もかもが恵まれていて、清潔で、治安も安全だし、便利で、食べ物もおいしくて…。そして旅をして、初めて知りました。確かに、ほぼ完璧な社会に見えたそうです。ところが、自殺率が先進国の中で第一位だということ。彼は映像の中できれいな森の中にいました。美しい日本の自然です。けれども、そこは自殺が多発する富士にある樹海でした。だれもが、不安を抱えています。

そこで、イエス様がしてはいけないということ言われています。「心配する」ことです。心配といってもいろいろありますが、ここでは、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかという心配です。これは、ただ何を食べるか、飲むか、着るかを考えているのとは違います。ああ、着る物どれにしようかな？と迷っているのは、イエス様がここで言われていることではありません。そのことによって不安を抱えていることです。その時の心の状態は、「自分のからだ」よりも、「着る物」のほうに心が行っている状態です。考えてみてください、着る物はからだのためにあり、からだを着る物のためにあるわけではありません。また食べること、飲むことは、命のためにあるのですが、食べる事、飲む事を、今、生きている事という事実以上に思い煩ってしまったら、どうでしょうか？

26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、あなたがたの天の父は養ってくださいます。あなたがたはその鳥よりも、ずっと価値があるではありませんか。

イエス様は、今、すぐ目に前に見える自然に目を向けさせています。そう心配している時に、私たちは神の造られた自然など周りのことが目に入らなくなりますね。もし、私たちが種蒔き、刈り入れ、そして将来の保証のために倉に納めるということをやって、初めて自分を養うことができます。もしそれをやらなかったら、もうこの世の終わりだ、自分は飢え死にしてしまう！とってしまします。けれども、それが空の鳥です。天の父が養っておられますね！ここで、労働をしなくてよいという話をしていません。テサロニケ第二 3 章 10 節には、「働きたくない者は食べるな」とあります。ここでは、労働をしているのであれば、なおさらのこと、という意味です。

そして、イエス様はこの空の鳥とキリストの弟子たちを比べます。いかがでしょうか？空の鳥は、市場でとても安い値段で売られています。ならばましてや、ということです。ましてや、あなたのことを当然、養ってくださるのだと言われています。

27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるでしょうか。

人間は自分で何とかしないといけないという思いが強く働いてしまうために、心配するのですが、自分の努力ではどうにもならない、先ほどの天候のことなどどうにもならない要素があるのに、それでもやろうとするから心配します。しかし、そのどうにもならない、自分の予想外、想定外のことがあって、主の御手の中で生きているのだということを認める必要があります。そこを、ここは、自分のいのち、寿命を延ばせるのかどうかでイエス様は問われているのです。

28 なぜ着る物のことで心配するのですか。野の花がどうして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装っていませんでした。30 今日あっても明日は炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、もっと良くしてくださらないでしょうか。信仰の薄い人たちよ。

イスラエルには、「アネモネ」というとてもきれいな、赤色や紫色の花が咲きます。そしてイエス様は、その紫色の花と、ソロモンの身につけていた紫色の王服を比べておられるのかもしれませんが。ここでも同じです、人間は着る物のために働き、紡ぎもします。そうしたことをしなければ、何も着る物がないと思いきや、何もしていないのに、ソロモンの栄華よりももっと美しく装っているのです。神がそうされているからです。そして、花は、明日、炉に投げ込まれるかもしれないものなのに、ましてや私たちに良くしてくださらないことがありますでしょうか？とイエス様は問われています。

そして興味深いのは、「信仰の薄い人たちよ。」とイエス様が言われます。とても分かり易く、いかに天の父が養ってくださるかを教えておられるのに、信頼できない私たちのことを信仰が薄いと書われます。本当に思いますね、信仰を増し加えてください、という祈りです。

### 2C 神の国と神の義 31-34

31 ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。32 これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

イエス様は再び、キリストの弟子たちに異邦人たちのことを挙げておられます。先ほど、異邦人たちの祈りが、何度も繰り返すことを話しておられました。偶像の神々だからそうなりますね。そして、まことの神を知らない異邦人の特徴というのが、神を知らないがゆえにそういったことに心配していると言うのが特徴です。しかし、私たちは違います。天の父がおられます。そして私たちの必要が何かを知っておられます。もちろん、無責任になってはいけませんが、しかし私たちは偶像

を拜んでいるのではないのです。養われる神がおられる、導かれる神がおられる、支えられる神がおられる、そして成長されてくださる神がおられます。野の花のように、空の鳥のように、主がなされることに、この身を任せるのです。

33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

イエス様は、ここで最も大事な言葉を語られました。「まず」です、第一にということです。優先順位です。優先順位さえしっかりしていれば、食べる事、飲む事、着る事は、次も大事です「加えて」与えられます。神を第一にして生きると、貧しくなり、苦しくなるという考えは間違いです。富に仕えないことを決め、神を選び取るならば、それらのものは加えて与えられるのです。この優先順位が大事。それから、イエス様はここで、ご自身の宣教の大きな主題である、「神の国と神の義」を語られています。天の御国とイエス様は語り続けておられましたが、ここでは珍しく神の名前を使っておられます。神の国、神の支配、神の名があがめられる領域が広がる事、それらを第一に求めなさい。それから、私たちが学んでいったパリサイ人よりもまさる義、神ご自身の義を第一に求めます。他のことが大事ではないということではないのです。第一ではないということだけです。

34 ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。

私たちの生活が、ここでシンプルであることを知るでしょう。今日、この日、十分に労苦があるのだから、そのことに取り組んでいなさい。そして明日のことは明日に任せなさい。主が、必ず養ってくださいます。そして、第一に御国が来ること、御心になること、これを祈りなさい。そして、互いの間に赦しがあること。誘惑から救われていくこと。こういったことを祈りの課題として生きなさいということです。